

明治二年（一八六九）刊「官許・官准」新聞・記事目録（3）
——『明治新聞』など四紙——

寺島 宏貴

一 はじめに

本誌第一〇・一一号に続き、今回は『博聞新報』・『明治新聞』・『開知新報』・『風のたより』の目録を掲載する⁽¹⁾。全二〇号をもって終刊した『明治新聞』は他の官許紙に比べ刊行期間は長く、これ以外の三紙はやはり短命に終わったようである⁽²⁾。『明治新聞』は四号に十津川郷士決起の檄文である「触筆死言」を載せて新聞紙印行条例に触れ、条例遵守する旨の請書を提出するに至った⁽³⁾。この抵触は、印行条例に定められた、官の「政法」に対する「批評」の不成立を示すケースに相当すると思われる。官許紙の前身である戊辰内戦時の各紙は「公議」の実現

を掲げつつ政府誹謗や「官軍敗走」を鼓吹する、虚実入り乱れた記事を濫発した。メディアの瓦解を招くのは「虚」の記事である。政府の側より発信される「実説」によつて否定されるべき「虚説」が引きおこした公論の激化・崩壊現象⁽⁴⁾、といえようか。

政府への誹謗記事が激発したのち発刊停止をくろう構図は、後年の自由民権運動に伴う新聞・演説といった「ニュー・メディア」の置かれた状況に似る。もつとも、民権運動の高揚期にありがちな演説会の「演劇的興奮」、ないしは讒謗律（明治八年（一八七五）六月）・新聞紙条例（同）以前の政府批判の暴走に示されるように、お上への誹謗中傷を盛り込んだほうが、メディアは「看官」を惹きつけてやまぬ力を帯びることになる⁽⁵⁾。となれば部

数は飛躍的な伸びを見せるであろうが、しかし印行条例にその方向を抑えられつつ、官許紙は建白書の転載や報道―この点は慶應四年時と変わらないが―をもって「批評」に代えるのである。

なお『万国新聞』・『横浜新報もしほ草』・『海外新聞』の三紙については後号に掲載する予定である。

【正誤】

前回目録の副題にある「誌」は「紙」の誤りである。ついで「はじめに」に示した新聞紙名と、掲載表のタイトルとの間に齟齬がある。『博問新報』（明治二年三月刊）の目録を載せるべきところ、実際は『都鄙新聞』（明治二年四月刊）のそれを誤掲載してしまった（『博問』は今回掲載の目録②である）。同じく「はじめに」下段七・八行目「四紙」とあるのは「七紙」の誤りである。以上の誤りにつき、今ここに深くお詫び申し上げる。

二 目録凡例

(1) 目録の項目について

記事目録の作成にあたり、次の各項目を設けた。

・ 号数

号数については基本的に新聞各号の第一丁に記載された数字を採録した。

・ 発行年月日

号数と同様に、各号の第一丁に記載された発行年月日を採録した。

・ 記事見出し

新聞の記事のうち、見出しの附されたものとそうでないものとが見られる。後者については記事内容から判断した見出し名に代えている。その際の記事見出しは「―」で括弧にした。前者について、見出しに記された数字は原文の通り漢数字を用いた。また「―」内は割書を表す。

・ 記事、広告、刊記の内容

記事については主として翻訳記事や内容を摘記した。また、見出しが例えば「御触書」（『博問新報』一号）などである場合にも、その内容を摘記した。刊記については巻末ならびにその手前の丁に見られることが多く、これらを採録している。前回の目録まで表中に「〔奥付〕」と記載した

が、表記統一のため今回から「[刊記]」に改めた。

(2) 典拠について

記事目録の作成にあたって依拠した各新聞は『明治文化全集第一八巻 雑誌篇』（明治文化研究会編、日本評論社、一九二七）、並びに『日本初期新聞全集』（北根・鈴木監修、ぺりかん社、一九八七～二〇〇〇）収載のものである。

【注】

- (1) 拙稿「明治二年（一八六九）「官許・官准」新聞・記事目録（１）——『中外新聞』（『書物・出版と社会変容』一〇、二〇一二）・「同（２）」——『博問新報』など五誌——」（『同』一一、二〇一二）。
- (2) 『博問新報』二の本文末尾（刊記の手前）に「第三号引続て出版スベシ」、「開知新報」二の西洋式二輪運搬車と物理法則の解説中に「空氣の抵抗力（第三号に於て鮮明すべし）」と地球中心の引力（第五号に於て鮮明すべし）」と予告されている。『風のたより』については宮武外骨『公私月報』が六月に第二号発行したと述べるも、二号以降は発見されていない。
- (3) 山口順子「ヴァンリードの新聞『もしほ草』官許をめぐ

つて——書誌データと史料による考証——」（『メディア史研究』一八、二〇〇五）、拙論「官許・官准」新聞の成立と機能——明治二年（一八六九）刊『中外新聞』を軸に——」（『書物・出版と社会変容』一〇、二〇一〇）。

- (4) 前掲拙論では初期新聞における「実説」による「虚説」の否定という理念を扱ったが、筆者は、初期新聞においては、虚実はきりしない怪しげな説——『異説』の相を見る必要があると考える。人物への褒賞や、これに関連する作爲的な「投書」の類が、「開化」の言説を彩るであろう。読者から距離的に隔たった事象が異説として読む側に伝わり、イメージを作り出す。この点は拙稿「近代の変化と不変——コメの時代？」白水智編『新秋山記——人と自然が育む環境史』（高志書院、二〇一二）で取り上げた。なお地方の初期新聞における異説のはたらきは、別稿を準備中。

- (5) 牧原憲夫「客分と国民のあいだ——近代民衆の政治意識」（吉川弘文館、一九九八）、八九・九〇頁。「民衆は『痛切』なる政治批判とりわけ役人・巡查等に対する『壮烈の言辞』（板垣（退助））を聞きたいがためだったのであり、さらには『弁士注意！』『解散！』といった『警官の譴責』の後につづく弁士ら主催者と警官との押し問答や“会場混乱”」（同書、八九頁）を期待した。

①『明治新聞』記事目録

号数	発行年月日	記事見出し	記事・広告・刊記の内容
1	明治2 (1869)	3月19日	
		〔表見返し〕	「浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」
		〔明治二年二月、新聞官許に関する触書の写〕	(略)
		新聞紙印行条例	(略)
		〔緒言〕	(略)
		檄文(秋月右京亮)	封土奉還、諸侯名号廃止、藩臣名目廃止
		姫路侯〔酒井雅楽頭〕建白	版籍返上につき
		〔毛利宰相父子へ神号宣下(豊栄神社)〕	(略)
2	明治2 (1869)	3月27日	
		仙台侯〔伊達亀三郎〕建白	諸藩版籍奉還の儀
		南部侯〔南部彦太郎〕建白	新恩の土地人民返納につき
		御国体の儀につき問題案四条(森金之丞)	(略)
		〔鈴木淳次他九人、辻元宗之進他四名を討取の うえ自訴につき〕	(略)
		駿州令条の写	静岡藩内の達書(文武、人選、藩事など心得)
		駿州藩中へ達書の写	幼少の当主逝去時につき
		〔三月御触書〕	言路洞開につき触
3	明治2 (1869)	4月8日	
		〔東京にて学校義塾開き、皇国の開化文明に進 み、我等の勉強すべき時〕	(略)
		〔出版広告〕	寰宇叢説(求我堂輯)
		〔刊記〕	「明治三年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」
		〔横浜弁天通にて町人体の者、鉄を割りし棒で 仏人を打つ〕	(略)
		〔相模川より横浜へ水を引く事願出〕	(略)
		〔学校設立につき建言(平田大学ほか)〕	(略)
		目賀田某上書之大意	百工館の儀につき建言
4	明治2 (1869)	4月	
		〔下総國椿村農人兼醬油造手跡治兵衛、郷学校 設立の由〕	(略)
		菊池梅亭と云へる人数字を以て函館のさまをよ みし歌	(略)
		〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」
		触覚死言	和州十津川の徒三百人太政官へ建言
		〔南部沖戦争〕	(略)
		佐竹藩拝借願之義に付御達書写	賊徒の掠奪にて藩内疲弊につき今般五十万 金拝借
		〔西京・大坂の間、物価高につき疲弊〕	(略)
5 (改4)	明治2 (1869)	4月25日	
		三月一二日西京に於て紀州侯願書之大意	東下御猶予につき
		〔山椒による療法〕	(略)
		〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」

5	明治2 (1869)	5月13日	三田藩士西京より来状之抜書	長崎に異教乱入、朝鮮情勢等
			〔会津戦争記事〕	会津藩少年にて自殺せし人の姓名は既に第六号に出せり、其後又其事実の委しきを得る故又此に再記するなり
			青森表へ出張せる黒田参謀（薩人）より同藩内田氏へ急状之写（四月二五日東京着）	松前戦況
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
6	明治2 (1869)	5月4日	三月一六日西京に於て御達書写	静寛院宮は仁孝天皇御忌年につき来年まで滞留
			〔伏見宮へ現米三百石下す〕	（略）
			別紙写	朝彦親王への行政官達
			飛騨高山百姓一揆風聞書写	（略）
			会津藩士少年にて戦死并自殺せし人の姓名	（略）
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
7	明治2 (1869)	5月18日	津軽青森表より情報の写	先鋒兵隊申付につき
			布令	乗船、楊陸請口につき参謀より布令
			津軽藩届書写	乙部村より上陸につき
			高崎藩御届書写	牡鹿郡小竹脱走兵につき
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
8	明治2 (1869)	5月23日	北地戦争の事を以て下文に載んとす、故に先ず弘前藩士の内話をとりて此に録す	（略）
			三条殿へ北地戦争の始末を言上書写	（略）
			松前表戦争に付海軍参謀より御届書うつし	（略）
			北地戦争の事によりて弘前藩より二度目の報告	（略）
			〔刊記〕	「浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」
9	明治2 (1869)	5月28日	幼院取建願書写	（略）
			牛久藩紀事	藩政の苛斂誅求につき
			水戸藩紀事	元家老市川三左衛門昨辰年脱走につき
			〔南部へお預けの脱走兵、東京に連行し糺問所へ引き渡し〕	（略）
			追加新報	箱館戦況、横浜入津の外国船につき
10	明治2 (1869)	6月5日	〔関宿藩士殺害につき〕	（略）
			北地出張の久留米藩より松前城攻報知の抜書	（略）
			蝦夷地出張の海軍参謀より御届書写	（略）
			御達	軍務官から保科弾正忠へ、叛逆首謀刎首のこと
			〔秋月悌二郎方へ永御預けの松平容保家来手代木直右衛門の禁錮につき〕	（略）
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
11	明治2 (1869)	6月13日	五月一四日軍務官へ各藩重臣之者被召、左之通被仰渡候事	（略）
			〔駿州藩目賀田帯刀、玉川上水を以て深川本所へ引く事を建白〕	（略）
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」

12	明治2 (1869)	6月19日	板倉伊賀家来より安中侯へ届書写	主人伊賀着京仕り自訴、天裁仰ぎたしとのこと
			〔板倉伊賀守、宇都宮藩へ御預け〕	(略)
			〔松平越中守(桑名藩主松平定敬)、横浜着船のうえ当分市ヶ谷州屋敷へ御預け〕	(略)
			〔箱館脱走兵についたフランス人、箱館より横浜に到着〕	(略)
			〔箱館の脱走兵艦、対馬に赴く〕	(略)
			前橋侯建白書写	皇国全国の政体・蝦夷地開拓教導の两件につき
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
13	明治2 (1869)	6月23日	箱館より帰陣せし者の直話	(略)
			前橋侯建白書写	版籍奉還につき
			備後福山の隊より北地平定の模様報告の抜書	(略)
			五月二三日賊徒追討の大総督清水谷侍従殿より、福山隊長岡田伊右衛門へ箱館に於て御渡し相成候感状の写	(略)
14	明治2 (1869)	6月24日	〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
			諸大名へ勅書写	諸藩内の執政ほか役職任命につき、華族を称すること、意見を上ること
			東京作	「大垣 木蔭良蔵」。
			五月一四日箱館榎本釜次郎・松平太郎より高松陵雲・小野権之進へ降伏之義申越候書写	(略)
15	明治2 (1869)	7月8日	〔人見勝太郎詩〕	(略)
			島津家へ被為下候御宸翰之写	薩長両藩股肱として朕一人を助けよ
			〔英国王子アルフト来日〕	(略)
			〔榎本釜次郎ほか助命を請う〕	(略)
			〔芝居町役者沢村田之助妻、あだ名珊瑚珠の話〕	(略)
			〔不思議なる蚊帳の話〕	(略)
			〔越前大野の議員戸塚左近右衛門の父百二歳〕	(略)
16	明治2 (1869)	7月15日	〔天皇、御馬場での乗馬につき諸藩知事随従のこと〕	(略)
			〔天武天皇御社湮滅なきよう沙汰〕	(略)
			〔觀世太夫朝臣となるを固辞し駿州行きを願うも許されず〕	(略)
			〔当節、諸藩侍分以上の者、紀州・長州両藩に限り勤仕すという〕	(略)
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
			〔箱館脱走兵の降伏につき〕	(略)
			〔押小路太夫謹慎につき〕	(略)
17	明治2 (1869)	7月25日	〔奈良府を軍務官支配とする達(行政官→十津川郷)〕	(略)
			〔十津川浪士沸騰につき〕	(略)
			〔元三州郷土河合縫殿之助張本として同志盟約発覚〕	(略)
			熊本藩知事建白書写	人材登用ほか四策(第二～四策は次号に記すべし)
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
			大村侯建言書写	封土返上の儀
			〔徳川民部大輔殿付添の渋沢篤太夫、フランス滞留中器物交易のため二万両蓄え他〕	(略)
18	明治2 (1869)	7月25日	〔栗本貞一郎海外旅行願い出を許可〕	(略)
			〔海外渡航中の外国官規則〕	(略)
			〔手跡治兵衛の郷学校統報〕	(略)
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」

18	明治2 (1869)	8月4日	〔大塔宮の神号を鎌倉宮と宣下につき〕	(略)
			西京赤心士歎願書の写	有栖川御殿御役人中へ、一隊立て申したく嘆願
			〔箱館降伏人の内榎本釜次郎他札問所へ引き渡し〕	(略)
			〔因州藩より手代木直右衛門・秋月悌二郎兩人松平小次郎家来へ引き渡し、御預け〕	(略)
			〔芝新納町嘉兵衛店銀次郎と女房のぶ、娘たまを殺害せし一件〕	(略)
			〔山内宗派の対立をめぐる盟約につき沙汰(行政官→高野山金剛峰寺)〕	(略)
			〔刊記〕	「明治二年己巳三月 官許 東京浅草菊屋橋大黒屋幸助蔵版」
19	明治2 (1869)	8月12日	七月一七日上州各藩待詔局へ建白書写	国産品の外国への売買代金を借財償還に当てたし
			〔英国王子浜御殿へ到着〕	(略)
			保科家歎願書写	正金引換の沙汰あれども国事多端・弊邑疲弱につき
			〔東京札問所へ入りし榎本釜次郎他降伏人の引渡方〕	(略)
			〔榎本、また三条実美・岩倉具視の写真よく売れる〕	(略)
			七月一四日五島両家へ御達之写	太政官から福江藩知事へ、五島鉄之丞知行所郷村請取につき民心沸騰
20	明治2 (1869)	8月22日	浜田藩事情書写	慶応年間(第二次長州征伐)からの浜田藩情につき
			〔刊記〕	「浅草菊屋橋 大黒屋幸助蔵版」

②『博聞新報』記事目録

号数	発行年月日	記事見出し	記事・広告・刊記の内容	
1	明治2 (1869)	3月17日	〔緒言〕	「編輯 山本常五郎・川口雄蔵 製本 和泉屋半兵衛 敬白」
			二月下旬御触書之写	新聞紙官許につき
			秋月候檄文之写	郡県への復古、諸侯名号廃止、藩臣を朝臣と称
			一ノ宮候建白書之写	(略)
			〔白山・駒込辺の植木師、小石川氷川明神下高井・蜷川・小笠原三旧邸ならびに御薬園まで一円になし、異人遊覧のため奇木・珍石を集めし事〕	(略)
			〔ペーリー紙より抄出、イギリス女帝第二子「イデンボルグ」当春来日のこと〕	(略)
2	明治2 (1869)	3月28日	〔刊記〕	「明治二年巳 己三月 官許 山本氏・川口氏蔵版東京書林 西洋書屋 日本橋四日市 和泉屋半兵衛」
			〔広告〕	和泉屋半兵衛売弘の西洋書(英政如何、英国大隊図解、仏蘭西撤兵訓練、金札早算用并銭相場等)
			一橋侯建白書之写	土地人民還上仕りたき儀
			御触書之写(行政官)	軍艦武蔵丸破損のこと軍務官へ届出につき
			本多侯建白書之写	版籍・封土返還につき
			町触之写	鉾山開拓の儀府藩県へ願ひ出、金銀精錬、金銀銅売買苦しからずのこと
			〔東京開成学校にて仏・英語学の伝習開始、諸侯より土庶人まで日々出席これあり〕	(略)
			〔牛込早稲田にて義塾開き各国の学教授〕	(略)
			〔野州太平山に皇国学校ひらきし由〕	(略)
			御触書之写	官路洞開につき触
			〔浅草御蔵前八幡宮地内の不動尊下谷新町辺へ引移りになりしとぞ〕	(略)
			〔第三号引き続き板行すべし〕	(略)
			〔刊記〕	「明治二年巳 己三月 官許 山本氏・川口氏蔵版東京書林 西洋書屋 日本橋四日市 和泉屋半兵衛」

③『開知新報』記事目録				
号数	発行年月日		記事見出し	記事・広告・刊記の内容
1	明治2 (1869)	4月29日	〔横浜野毛の山にて西洋の時を撞く免許を蒙り、この辺りに桜を植え、茶店を出し遊歩の地とす〕	西洋時法の解説について「袂時計盤面之図」1葉を付す
			〔二十四節気それぞれの時鐘時刻一覧表〕	(略)
			〔刊記〕	「明治二年己巳歳四月 官許 橋爪貫一編輯館 霞外蔵版」
2	明治2 (1869)	5月15日	〔東京市中小車をもって諸物を運送すること大流行す〕	西洋式二輪運搬車、引力、「慣性」についての解説(付図4葉あり)
			〔刊記〕	「明治二年己巳歳四月 官許 橋爪貫一編輯館 霞外蔵版」

④『風のたより』記事目録				
号数	発行年月日		記事見出し	記事・広告・刊記の内容
1	明治2 (1869)	4月29日	(表紙)〔発行人名〕	「浅草福井町 威世屋蔵版」
			〔下総国小金ケ原開発の儀を商社の者共へ命あり、金米許多貸下げの事〕	(略)
			〔久松修理の公儀実名論〕	(略)
			〔常州辺の藩士朋友の蓄えし百両盗り新吉原にて失財士に斬り倒さる〕	(略)
			〔三田辺へ救育所取建〕	(略)
			〔本石町辺の商家の妻丁稚とともに田圃道にて賊に出会う〕	(略)
			〔商家の七才娘、主が置きし金札二枚でチリチリ紙拵え〕	(略)
			〔分家の狂言殺人のこと〕	(略)
			告演	新語御加筆あらば有名にて送られたし